関原軍記大成

一慶長十九年大坂陣のとき貞恭
松平周防守忠弾正等と陣を
同じくして大満りもむひ戦功
あり聖寿寺山陣同じくして神清に
蔵守と陣を再陣には松平武
に勧ずる寛永譜

藩鑑巻之百八十三目録

か部二

加藤左馬助藤原嘉明

藩鑑巻之百八十三

加藤

九馬助藤原嘉明（よしあき）ハ清めの孫六茂勝を称す三之丞教明の子なり教明ハ三河國の住人にして徳川家康譜第の臣家人なりしが永禄七年故ありて退去し後つ

ゝに豊臣秀吉より佐々加明もつきの
中に父とともに本國を去りひゝくな
りゝ秀吉に仕へ天正三年僅に十
三歳にして播磨國三木の城攻より初陣
し西陣ののち同四年三石石を宛
行はれ同六年備中國須久毛山城攻
のとき高石あり二百石を加増せら
る同十一年迫江國柳瀬の軍賞として

て三千石を授けらる同十三年七月從
五位下に叙し左馬助に任ず同十に
年淡路國三原津名二郡の内にを以
て一万五千石を與へらる後伊豫國正木
城に移さる六万石所を領す後朝鮮
攻の軍賞として加恩の地あり慶
長三年にいたり総て十万石を領
す同五年関原市陣の後

東照宮伊豫國松山城より移せられ十万
石を加へ賜り合せて二十万石を領
す元和九年従四位下に叙し寛永三
年八月侍従に任ず同日年二月陸
奥國會津若松城より移り四十万石を
降賜すまゝ二男民部少輔明利より
同國二本松城三万石を賜ひ聟の松下
石見守重綱より三春城五万石をたまり
て加明より属せらる同八年九月十二日
六十九歳にして卒す

一 天正十一年志津嶽の合戦より双方とも馬
を入れ槍を突合せ互に形骨をつくし
合戦りし歟味方ともに一足も引す
切つまりつつ孔明戦ふ変に越前方
まけ色より見元ヶ山を内に推六玄蕃
大将生捕ヶ山につき秀吉作出されい

小性ども軍をゆるし首あるかとうせさ
ゆへと仰られまして首加茂孫六平野権平
福島市松服坂喜内片桐助作糟屋助右衛
門加茂庄助此七人は敵と入まゝ捕仕
られまして今二人は力にて右の元国前まで
らさゆ九人にて山内まで女人は敵を持さ
るゆへ残る七人は宗田合戦の七本槍と
仰へゆ志津嶽合戦場の吟味なされ右
に書付ゆ七人まゝ八百五十石二百石
宮に宗今度宗田合戦にて手柄いさ
まさ三千石つゝ賜はれゆ 見聞書

一 天正十四年の秋加州長曽我部 土佐守元親 仙石 権兵衛尉秀久 服坂 中務少輔安治 等と豊後の国まで
一つゝり大友の軍勢を引具し浦津
中務大輔家久と戦ふ長曽我部仙石
等と先と〳〵大友の軍勢まゝ軍し

長曽我部の嫡男信親うち死す加明服
坂二人家久と戦ひ追ひ関白の所
感たらしめす　藩幹譜

一秀吉朝鮮征伐のとき唐船と云ふ所よ
番船を乗り出る筑紫佐波郡の虎
ひそかに彼よまさんとし数の小船二三
艘をのり取ける加藤左馬助加明ハ兵
庫より越されたるをいさゝかの家来

培国右衛門にをたゝをひふくめ物見よ
船を出す培右衛門に進んで陣す
加明大きに怒る所を軍法をや
らる事にくさものこもりなあまを制せよ
と聲に呼ひさけ扉を上げ乗ねけ
ども兼その謀なまを培ハうしろをもか
へりみす爰にをゝ加明ハみるに
思ひさる所にをゝ自分早船に

のりこまんとて追ふて行く
加明の出るを見て加明の諸卒一同よ
り出し船よりつけて拘る云
せて楽取主と下知し大船多く楽
り其日の言伝諸将より勝主たり乗り
横目この会戦の次第を秀吉へ注進する
とき高虎の曰く船軍の先楽ハ我より戦
ひの誰かあらんや只言虎ハ群をなる主

たりと記さるへしとて此る加明を
静かに我今日の戦ひ諸人のみる所り
て夜ふけく歓の歌聲一なる躁を伺
ひく小利を得たるこも寡首をかさなる
に同じ夜と昼と異なり小と大とハ同
らす伏州のうらき今日よりつくハ
樹しくも我よハ及ばれまきものを
とあさ笑ふく兵らまけまハ言虎をな

りうりにたへす太刀を抜人と爲めく
と一座の人々る虎をたゝき者つむ加州を
庄ひさゝと云くゝ柱に寄りかゝり爲ら爲
とも変せす新さも動うさす大長刀の刃
をそつゝたるう如く見るゝ仕ふ
うな人々ゝて取乱せるい丈夫の仕
業とをさりる所なり光をみる人々の
器量似も似すと加州を感称せすと云

事なし　校合雑記

一

加賀加州ハ諸将打寄り各軍評議あり
ける中に用船調る所にて何とかくひ
こり座と云ゝ若堂を拵さ命ふを見
ゆる欲の番船を奈取るへゝ永船用意す
へゝと云ひ是ゝさあゝ奴所にて座
る場所にけるをくすれ引居た
る勇士とも公密言を少と笑ゝ小船

三艘より元警りて花の如くに漕出す
目分るゝより法將を尋るとあれよ
あまよ加茂いもの者とも抜けするを
制し留めよと怒り罵りける加明ハ
加藤斯て有まハ左馬助の小姓ども
見るハ僻目の業にも知せず率尓に発
出せり先ハ自分まづ押留めす
人ハ留るまじ彼者ども追

てまづんと捨て兵船一艘より出す
り押出す加明ハ思ふまに法將を
出し奴き揺よ揺んと急きしうハ
漸く三艘船より追つけり加茂の一を
の艘最初の密意の差留に用意也
一事なまハ吾一にと追すつて漕
出す二里ばかり向ふより朝鮮の大船四
十艘除り飾りて備へたり夫よ

りまで一里ばかり中なる大船数艘載
重こもなく漂めたまへ倭軍小
勢と云へども捉こしからんやうハな
りけまとも法将加藤を出し抜き
たるを口惜く思ひ我もこと船を発
り押出さるゝ処に加藤の船を目ける
く並列の番船漕来り其ほなりに
加藤の船に漕を追取り巻く指法引法

散こに対る加州兵を見欲船の留を六留
にて一鉄砲を揃へ心を志つめ打てや
と下知よつて鉄砲をつるへけよ打け
るに欲船の士卒二十人ばかり打倒し
けるこまて驚き騒く処へ水を揖を汗
水よりつゝ竹一の番船を押著けあ
に鉄を打掛こ引附け個次前を清土
方長を清塙図右清つ萩飛右清つ等其外

の勇士とも競ひつゝ敵船よ飛乗
りける世勢よ畏まけるゝ一人もえんさ
りけまハ何まも不審よ思ひ踏板を引
上げえまハ皆船底よ窟まへ入ゝまりを
引志かり矢先を揃へゝ待居たり土
方長兵衛を船めの剛勇の少年白刃を振く
一度よ三つと飛入けり元来怯弱なる
朝鮮人つゝひたる弓矢を捨ひと合せ
手伝ひ漕返すを悉く切ゝ捨く助
け来りたる番船へ押著け飛乗りく
切ゝ廻りけり最初一艘切取らまたた
るを並に畏まを更よを向ふ者なく甫冨
まるりゝく又を詰け或ハ海へ飛込空船
まるりたるを十艘ゝゝ乗取りけり
後まを諸将の船ゝも加藤の軍士先駆
をゝゝを抱を顕ハたるを見ゝく弥

怒り舎釋もなく向ふなる胴勢の船を奪ひ取らんと揉みよせんとく押分る勢ひよ怖き歟將とゝえたる樓船一番よにけ退くゝまに續ひくゝ総番船一同よ逃げ去る倭軍ゝまに氣を得くゝ我一よ奪取らんとにくるを追ふこと頻りなり（安國寺恵瓊実記 大三川志）

一去る廿日朝鮮の水軍大に破まこをうけまこバ大將元均援兵を李舜臣よこひ先の船辱をすゝんと舜臣とともに兵を進めゝ構の聲洪濤を動し帆風飛雲を追つゝ行ふこを見乃梁と〻ゝ船にゝゝ日本船の軍將九鬼大隅守嘉隆藤堂佐渡守高虎服部中務少輔安治加藤左馬助嘉明の兵よ出あひたりこゝに舜臣ハ元均よ向ひくこの

地海狹ふ〳〵水淺〳〵兵船を繫うへ
さうと欲するにまことこゝよ江〻真便不自
由なりさて〻一旦倭の兵と戰と交ゆる
後ろ〻りにけ〻こてを退き倭軍を
誘ひ〻海の澗さ所よ至り〻相戰ふ
よいまくへらすすとひけまい元均々
先度初ての戰よ敵よ後を見せ〳〵こと
真憤り今まを〻止されい惟忠よ軍

とすしめ〻搏戰せんとゝふ舜臣少て
元ういまゝい兵事を考すか〻のこと
くんい戰田戰ふこも必らす放んこと
疑ひる〳〵我よ任せたまふへ〳〵こと
真謀を定めける日本の船よの諸勢も
すゝよ備を進め〻漕出すにさまよ
りさき軍評定のありけるこゝ九鬼
い石火矢大筒を以〻敵を打すくめ時

分を伺ひ奏ふらんとゝへい加茂左馬
助い押うけ〻戦ひんもんを大岡石火
矢のかのみをうち〻敵をいつも逃逃
すたりゝ英国なら陸の戦ひもや
数度の勝をこうりなりと少に私なの
面〻ことたる事ども仕出さぬは惜し
き事なるへしとゝ義堂昭坂等を
約よ伺ひ此度の評議よをく〻い安大

事をいふものゝ仕損する事あら
ハ陸の戦のをくまこともなるへしなこと
いへども左馬助一人ハ是非よ戦ひんと云
つのるゝゆへを以〻諸将の意一決せす
されども加茂ゝ辞のつよりしまて
大隅ゝを始とし〻さい戦ふよ定めよ
志〻〻先明朝早〻出宅の通りの物
見船法ひとり二艘つ奏出さる敵の

拵を伺ハせ〳〵こゝに闘ひとなしむへけま
明治ハ六月二十四日の夜まとり法々の
物見ハ早船を漕ゝへし歟の船こも九
三百俵艘よあまり〳〵瀬戸口より漕つら
ね相見えゆゝ其船を二々よ分け一々ハ
山の麓よ指添ひく備まハ一々ハ沖な
る海よつさ〳〵艫揖をつゝめたりと
報す諸々の早船ハ代のこゝ〳〵告け
来たる服坂ゝ物見の船のみ心あり
てや殘りけん歟船より二十俵町を
隔て沖の方に浮めたり九馬助ゝ早
船ハ代さまを見るとあまハ服坂殿
の母衣武者ゝいさ我もあの船と
一所よ漕よせよと艫をたゝし切〳〵す
みゆく加藤ゝ船よ乗りたる一艘ハ塙
団右衛門藪典九郎東勘右衛門一艘よハ

宮河権七郎左衛門長安清尉等を乗り
ける左馬助ハ法師に先立て一艘を乗
出す国右衛門等の乗たる船其留二三町
にもなるらんと思ふとき左馬助自ら
采幣をとりて打ふりよ振まい
しつゝ上下船をなす国右衛門等
これを見てまさに大将の麾ふりたま
ふかゝるとこそ宮ふらめ先つ艫を
立てゝ漕ぎ出るなんとひしめきたり九鬼
嘉隆を初めとして先立つ船の卒示た
かるハ誰か船そこゝもかゝるまゝ味方の
人数をもるこも少るまゝ大勢よこり国
れ味方討せて論ぜし今ハ徳ゝり
にゝまこゝゝ艫先をそらへて進みけ
りすゝに左馬助ハ下の船にもを下
知を加へて乗ふる事に朝鮮の船も

兼ねて巧みに相図をなしい舞ひさせる時
ないよりと麾旗をさつと揮たつるに
朝鮮の船も一度に棹を押へて退
ひくを欲とて引出す日本勢色を見るより
朝鮮の弱兵もさすがこれ逃るハ追討こ
そ左馬助主先に采幣さつとすめと
ここのくりはけるすくに溢口と出ると
見てけるハ朝鮮の大将李舜臣鼓を自

ら鳴すこと一聲すると朝鮮三百艘の
船中より只一艘左馬助の乗りたる船
に漕向ひくを戦はんとする勢あるハ元
均が先度の恥をすすんこそ弛せたる
船と少えけりをみる朝鮮船兼ね
ねりに立並くくるると左馬助と中に
こりこめ指つめ引詰め射たりしハ
嵐に雲を捲くが如の勢より怪志けく

遠目のおそき矢前にい走のさ進んやうも
なく左馬助歓船迫くちつさてを目
すくに五六目と見ゆるこさ鉄砲の前を
掠へよあ〳〵矢を一切たすな心を志つ
め筒先を下ーてをおてと下知をない
鉄砲の手の者ども袖重りこゝ者に
筒先をなく〳〵つ一度に火蓋を切る放
てい何ゝい伝〳〵たまるへき朝鮮船の水
手ども将棊たをしする如くよたら〳〵
と艶色けるされこも雪舞兵衛てこ
らへ歩たりし亀甲船とゝ号あ
り日本に〳〵ハ此船を亀船とも名付る
なり抑其船いの仕立にハ板を厚くたり
せ船の上の屋よう〳〵を形ち亀の甲の
如にし戦士櫂夫皆其内よう〳〵走てむ
ひ備又前後左右にも多く火砲を備へ

ゐる〳〵縦横出入こゝろにまかせ多くの
歌の船こもの玉中を押わけ〳〵楽めく
らすハさつなゝら織婦の機上に梭を
くるゝ如くゐる左馬助の楽たる船すて
に危しと見るゝ服坂の物見の船を
始とし〳〵揖を早め押来たる馬助
眼をくゝつ〳〵見開き味方の船をな
と歌船よ楽舟さてるそと声さゝりに下知

をゐしけるハ萩代右衛門といへる者ち
拘を指のへゝけんとしたりしを
朝鮮船の兵士こもさゝり拂ひ二三度
四五度に及んでも中〻拘ようけられす
左馬助声さゝりに歌船へゝけ入んと
たまとも歌船ゝり射出す矢雨の如く
にして二三箇所も手を負たまひ意ハ
剛よ勇とゆへとも遂よ叶ハすそに

海中へ落入らんと考へしに水よと
もあらぬこゝろつきに引あけたり他
右衛門今日の一番乗りハ我なりと一つ
の船より花のりたまハ九馬助もつひて
入るを外たまうれと一艘の船より花乗り
て見るあまたと人一人もあらぬこそハ
心得ぬ事なりと藪東中島戸田宮川
河村藻田塙五方の族ゝつまも色皆も

加茂の家に剛の者ゝを名をさしむ
男ともなれハ我劣りとて乗り入る
にも頂者も多かりけりこの船の板
子をつゝさせよ面々と互に聲
をかけ合せ一ゝにおしをなせども中ゝ
丈夫よこゝらへたる亀甲船のことな
ハるみくにてハうなりぬとやらくよ
しくをねくすに内にハ弓をひき去か

りたるを矢を引加へて敵の来たるを待うけたり一日六人あまり急ぎ飛ばしり太刀ぬきつまて喧嘩と入まいハ朝鮮人矢を放すへきなるもなく各海へ飛入る者も多けれと或ハ切まて生捕まて遂にこの船一艘をハ加藤ひとりにて奪ひけるに服坂ハ母衣の士を小船一艘奪ひる加藤ハこれに一面目ある

心地にて船を奪ひ切り味方の船へ奪ひ入れす朝鮮の者ともハ加藤ハ三艘の船にも思ひ切たりとや見たりけんまた倭軍の後船すくにそろ間迫つけハ待ちく戦ひんとや謀りけん船道一方をひらきて九馬助かこの船をハこしめもせすしてく通しけり

このとき加藤ハの者萩の奪たる船の

円三十一人の兵士二十一人涼を取り一人
ハ討ましけり　朝鮮軍記大全

一慶長二年日本の諸将竹島の海上た
ゝい三十八六町を隔て安宅船とゝ
湊より蜂須賀阿波守日本船よ
を集めて評議す阿波守言けるハ
抑あの山の如くなりし数万艘の
大敵ハ日本僅の小船小勢にて矛合せ
戦ふ事成りがたし所詮この不
の船軍を先止て陸地より箱岡中を攻
侵し給へとありしに太田彦
弾守云けるハ眼前の敵を先亡て
目にも見えぬ陸地の敵を斗らんとの
事予が分別にハ心得がたし各い
にとありけまハ加藤九馬助云けるハ
作のごとくこの大船を其儘捨置くハ

谷山浦表推来船より発出日本より渡海
の根船を支へしさあらい味方の軍士
上下凡よ皆主なん不肖の果末座の推
参たりへとも先年文禄元年に征伐
も出来仕たる石田治部少輔ひらへ分別
の一條を肖き三井沢清正が我意より任
せ捨身の働き忽ち勝利を得たりと
いへとも出来仕りあるに依て治部偽り
の言上実儀とあり清正が忠節ハ空く
剃へ出動乱を企りぬこの度七頭のハ
来仕下知を肖き越度の働仕よとい
ふい曲事に作付らるへきの上意に也
に成るの條如何やうにもハ先引たる
へしとそ云ける法将然れとしく物
ふりの一人もありけるハ左馬助嘉
明発弾ちに向ひく果かし発出歟船

のやう旅を巡見いたしいんやと伺ひけまへハ花弾を諸大将歓の大船より碇泊之進さるを見及ひ〳〵九馬助より見合し少し乗出し巡見せまほしへと答ふ九馬助此事行の下知をうけ此ん〳〵我関船より乗移り静より漕とをこさせく漕出る変より毛利を彼を云ける八又りや九馬助卒尓の働せん為よや各相違もいまゝ極らさるに味方崩まの抜撫八云用るゝりといひけまへハ九馬助〳〵〳〵と打笑ひいまゝ彼をあまたかと山の如くの大船より乗の数帆の小船にくゝりてか卒示のゝるへきやハ事行太田度のは使とゝゝ巡見に出るゝりと云捨く二町所り乗出しける花弾を我船の小舞九に乗り移るを見く鴻津又七所

我船に花弾り急き漕を上げ櫓よ
んく漕出す旗艦の者彼方を見く
又七郎卒忽為り漕止へくと大音
聲に下知すると雖も跡を追る氣
遥もなく三町ばかりの内外にくを
や典厩の船より座を双ふるほとに押た
りけるハ典厩の船矢倉の棟より花火
名乗論貫の馬印を先上味方つけと

下知しけるハ花弾る船の矢倉に弦の
ほりて五人に張る熊の皮七幅の白き
のまんつきたる馬験をふり上く左馬
助又七郎対すなつけ兵船と大音
の下知より踏ひて安高麗の漕せまして
漕深めたる味方の兵船波綱を打切く
我劣らしと漕出く歓の大船より悉く
漕つけたり船りとくとも味方の

私より敵船の舳先より二百柄
の強さへいまゝ届かされハ然入る事ハ是
悟ゝ及ハす敵方にくも日本の私ハ大
船の櫓下に然分たるに依てすへきやう
ハなかりけり味方の諸軍士拙く武
略をめくらすとゝへとも更ゝ及ひ難く
見えける為に軍兵ども小筒をつく
敵船をゝ立水丈ゝ櫓をゝらせす大矢
を射込炮烙火薮をしく打込けるハ
敵番船の中ゝ影しく取散し迯る
火薬に火つき雷よりも怖しくひゝ
き渡り焼立二重三重に裂海しなる
歩の板軍兵ども海中に列落すより
に照たる日和にくく次の外ゝ焼けまゝ
船底ゝ居たる軍兵水丈箭に立るまて
船中ゝたまり滑す然後左右の海

中に死入〻死よけるの年の刻のころ
より未の刻の終りまで二時餘りの
船軍よ燒別奈良たる朝鮮の番船一
百七十四艘なり

大河内秀元朝鮮日記

国立公文書館
National Archives of Japan